新自由主義批判の先駆けとしてのアルチュセール

『再生産について』と 1968 年 5 月以後

東京女子大　今野晃

1　目的

理論的営為の意義・任務とは、抽象的な体系を作り上げるのみでなく、現実社会で起きうる様々な問題をあらかじめ予見し、それを予防あるいは批判することにある。本報告では、こうした理論の責務を、アルチュセールの理論が、新自由主義についてなし得る可能性があったことを明らかにすることにある。

2　方法

ここで本報告が注目するのが、理論的研究としては、新自由主義的施策に対する批判として高く評価されている、ボルタンスキー＆チャペロやセネットである。また、実証的研究としては、1968 年の五月革命を具体的に分析するゴベルの業績である。彼らは、それぞれの研究方法で 1968 年に起きた諸々の出来事を契機にして、今日我々が生活する社会体制が作られたと分析する。

これに対して本報告では、まずアルチュセールの遺稿や書簡に注目し、彼が五月革命の学生運動にどのような立場を取り、いかに考えていたのかを検討する。その際に主要な文献となるのが、彼が遺稿として残した『再生産について』である。

セネットやバウマンは、現在の資本主義のあり方を検討するために、19 世紀の資本主義を比較対象に持ち出す。同様に、アルチュセールは、1970 年前後も執筆した論稿で、現在の新自由主義的考えが社会に浸透し始めつつある時期に、19 世紀の資本主義を検討対象としていた。その中で、当該世紀の厳しい状況下で、労働者達が苦しみつつ組合活動などを展開したことを明らかにしている。無論、組合という組織形態が持つ問題を彼は認識していたが、その上で、それが担ってきた歴史的意義を評価する。

また、五月革命に関して分析をした別の論稿では、彼は、学生運動が労働運動に結びつくべきだったとしている。これはすなわち、学生運動が、労働という社会的基盤をないがしろにすることで、人間の自由や解放、個人の独立を主張したことに注意を促している。この論点は、セネットやゴベルによって指摘されている点でもある。

新自由主義が推し進められたことで、現代では社会的連帯が喪失したことの問題点を指摘する立場もあるが、アルチュセールはすでに 70 年前後から、同じ問題を、資本主義の「発展」の中で考察していた。その上で、その問題点、つまり「自由の拡大は全ての人々に利益になる」という考えが、一部の階級を利するイデオロギーにすぎないということを指摘していた。

3　結論

以上のような分析によって、新自由主義的な制度・施策を準備する社会意識が、当時浸透しつつあった時代に、その問題を見越した上で批判をするという、優れて理論的意義のある営為を、アルチュセールがなし得る可能性があったことを、示す。

4　文献

Althusser, L. [1968-70] 1995 *Sur la reproduction*, Paris, P.U.F..（＝2010 西川長夫他訳『再生産について上・下』平凡社ライブラリー）

Althusser, L. [1969] 2006　“À propos de l’article de Michel Verret sur « Mai étudiant» ” *Penser Louis Althusser*, Pintin, Le temps des cerises.